

論説

ルドルフ・シュタイナーの人間観と宗教性

—西田幾多郎の『善の研究』を手がかりに—

西井 美穂

はじめに

ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861–1925) は、19 世紀から 20 世紀にかけてドイツで教育や、建築、農業、医学など様々な分野において影響を与えた思想家である。彼の思想は一般に人智学 (Anthroposophie) と呼ばれ、ギリシア語の *anthrōpos* (人間) と *sophia* (叡智) を組み合わせたもので、「人間であることの意識 (Bewußtsein seines Menschentums)」¹ することを意味する。シュタイナーは、人間とはどのようなものであるかを考察し続け、個々の人間が自らの個性を生かし、かつ人間としての尊厳をもって生きるためにはどのようにしたらよいかを、人智学を通して示したのである。

彼がこうした思想を提示した背景には、彼の生きた 19 世紀末から 20 世紀初頭のドイツの複雑な社会状況があった。ナショナリズムが高揚し、フェルキッシュ (*völkisch*、民族至上主義) な方向へと突き進み、科学技術が重視され、思想的には、科学思想、神智学的思想を基盤とした神秘思想、フェルキッシュな思想が人種主義の狂信へと結びついていく²。このような思想状況下で、シュタイナーは、時代が唯物主義の方向へと向かい、人間の心の中から自由や宗教的な敬虔さなどが失われていくことを危惧し、個人としての人間が道徳性を取り戻すことで、社会全体も道徳性を取り戻すことを望んだ。1919 年の最初のシュタイナー学校の設定時の講演で、これからの時代の課題は「知的感覚 (気分の良いこと) 的 (*intellektuell-gemütlich*)」³ なものではなく、「道徳的精神的 (*moralisch-geistig*)」なものだと述べ、一人ひとりがこのことを認識すべきだという見解を示した。

このように、シュタイナーは人智学を提示することで、人々に自己と他者

が共に幸福であるという道徳的な方向を選択することの大切さを喚起しようとしたのであるが、それは「霊学・精神科学 (Geisteswissenschaft)」に基づく科学的領域に属すもので、宗教の領域にあるものではないと考えた。「霊学・精神科学」が科学であるかについては議論されるべきテーマでもあるが、シュタイナーはそれを、通常感覚では知覚できない世界を超感覚を通して認識するという、認識能力の拡大により人間を洞察する科学と考へ、信仰に基づく宗教とは厳密に区別したのである。彼は、人々が「科学的思考」に基づき自らの思考を変容させることで、道徳的選択をすることを望んだ。

このようなシュタイナーの考え方に基づくシュタイナー教育学は、日本では個性や自由を尊重したものとして評価され、幼児教育のブランドとしてその地位は確立されている。しかし、シュタイナー思想そのものは、明治以降、神智学の流れの中で受容され、その神秘的側面のみが強調された結果、オカルト、心霊主義としてのイメージが強く、個人的な神秘体験に基づく神秘思想と見做されているのである⁴。シュタイナー教育は高く評価されているものの、その教育の基盤である思想は学問的な研究対象とされてはこなかった⁵。教育哲学者西平直がいうように「思想史における位置づけすら不十分なままである」⁶というのが現状である。ドイツではシュタイナー教育学は更に厳しい状況下におかれ、シュタイナーの思想的な部分が「非科学的」なものとして見做されているため、シュタイナー教育学は経験的実証的な科学とは認められていない⁷。シュタイナー思想への批判は、宇宙の進化と人間の意識の進化を結びつけた宇宙論が神秘主義であることや、キリストが人間に「Ich (自我)」を所有させるという聖書解釈が「非正統的」⁸であることに向けられている⁹。

しかし、実践活動においては評価されているシュタイナー思想は、神秘主義という理由で、検討されないままであつてよいのだろうか。本稿は、こうした疑問に対して答えを出そうとするものである。シュタイナーが思索し続けてきた人間についての考へや、彼が人間の本質とする宗教性¹⁰がどのようなものであるかを考察することで、彼の人間理解に迫ることができると考へた。このような考察により、これまで神秘主義の枠に閉じ込められていた人智学という思想の一面が明らかになれば、実践活動との繋がりが見えてくるの

であるが、それはまた現代に生きる我々に、人間についての新しい視点を提供してくれるように思われる。

彼の思想は、先にも述べたように、「道徳的」な方向、すなわち自己と他者のよりよい生き方をめざすよう人々を導くことを目的としているが、その意味で人間実存に深く迫るものであった。初期の著作において、「倫理的個人主義」¹¹という道徳・倫理的立場を打ち出すことで、個の確立を促すと共に、個を越え他者と繋がることの意味を科学的に理論づけようとしたのである。この説は、進化論や原子論、古代ギリシアの密儀精神、キリスト教の影響も認められる¹²。

本稿では、シュタイナーが「人間であることの意識」や、人間の中の宗教性を重視していたという点に焦点をあて、人間が自己の生命の有限であることの自覚から永遠であろうとする「宗教的要求」をもっているという宗教論を展開した西田幾多郎と同様の思想的接点があることに注目し、考察を行う。両者は、自己を統一し、その統一された内的世界が他者や神・善と結びつくという論を展開した点において共通している。

以下、シュタイナーの思想の変遷について概観し、彼の人間観が古代ギリシアとキリスト教的枠組みの中でどのように把握されているかについて検討するとともに宗教性についても考察する。その後、西田幾多郎の『善の研究』を手がかりに、シュタイナーの人間についての考え方を改めて考察する。

1. シュタイナーとシュタイナーの思想の変遷について

シュタイナーは1861年にオーストリア・ハンガリー帝国の辺境の町クラリエヴェック（現クロアチア）に生まれた。技術を学ばせたいという父親の希望によりウィーンの実業学校を経て、ウィーン工科大学に進む。彼は幼少から、数学、文学、宗教学、哲学など様々な学問について関心を示し、十代半ばには、カントに傾倒したが、大学時代にはフィヒテ、ヘーゲルなどドイツ観念論の哲学にのめり込み、カントに対して持っていた、理性には限界があるのかという疑問についての答えを、フィヒテやヘーゲルの思想に見出した。1894年に上梓された『自由の哲学 (*Die Philosophie der Freiheit*)』では、西洋近代が直面した哲学上の問題である物心二元論に対し一元論

(Monismus) を提示し、人間において二元的に分裂させられた肉体と精神に有機的関係があることを論証しようとした。ゲーテ自然思想の研究者や雑誌の編集長などを経て、1902年、41歳の時シュタイナーは神智学協会に入会した。この入会を機に、彼はこれまでの研究者、ジャーナリストなどの知識人としての立場を棄て、神秘主義者としての人生を歩み始めた。この「神智学的転回」¹³により、シュタイナーは多くの友人を失ったというが¹⁴、神智学協会会員が唯一シュタイナーの言説に共感してくれる聴衆であったため、自らの流儀で語る喜びを得ると同時に、後に人智学となる思想を発展させることができたのである。

神智学といえば、その歴史的立場づけについては様々な説がある。ドイツ神秘主義やロマン主義の潮流に位置づけられたり、ドイツにおける仏教的な思想が受容される流れの中に位置づけられたりもするが¹⁵、最近ではドイツ心霊主義の伝統から生まれたものだとする説も出てきた¹⁶。シュタイナーは神智学協会の事務局長でもあり、代表的著作が『神智学 (*Theosophie*)』であるとされていることから、シュタイナー思想である人智学も神智学と同様だと見做されているのである。

しかし、シュタイナー研究者高橋巖は、シュタイナーの人智学は、18世紀から19世紀初頭にかけてドイツでおこったギリシア精神の復興運動の流れの中にあるとする。高橋はこの時代を、「靈的衝動に基づいたギリシア精神の再生」¹⁷だという。その復興運動において、ゲーテ、シラー、カント、フィヒテ、ヘーゲル、などが現れたのである¹⁸。神智学徒になる前にゲーテ研究者であったシュタイナーも、こうしたドイツ的なギリシア精神復興の雰囲気の中に生きていたと高橋は説明する。

人智学が神智学の一つのグループであるか否かについては、厳密に吟味されなければならない問題であり、厳密な思想研究がなされていない現状では、安易に神智学と人智学が同じものであると見做すことはできない。事実、シュタイナーは、神智学入会后、10数年でこの神智学協会と袂を分かち、人智学協会を立ち上げるのである。1913年、かねてから軋轢のあったアニー・ベサント (Annie Wood Besant, 1847-1933) から神智学協会の指導部から除名され、シュタイナーはそれまでの神智学内にあった人智学サークルを独立さ

せた。対立の直接の原因は、キリスト観の違いであった。ベサントはインドの少年クリシュナムルティ (Jiddu Krishnamurti, 1895–1986) がキリストの再臨だとし、協会内に宗教団体を作り、教祖としたのである。キリストは歴史上一度きりの降臨とするシュタイナーにとって、それは受け入れることのできないものであった。神智学協会指導部とシュタイナーの軋轢は、心霊主義を中心とする指導部の方針と、「科学性」を重視するシュタイナーの根本的な考え方の違いから、すでに 1906 年頃から始まっていたのである。こうして、彼は独立し、以降、亡くなる 1925 年まで、精力的にヨーロッパにおいて人智学を広める講演活動を行ったのである。その講演回数は、64 年の生涯のうちで約 4350 回にもおよんだという¹⁹⁾。

このような経歴の持ち主であるシュタイナーの思想を三期に分ける通常理解は、シュタイナー研究者のヘンリー・バーンズ (Henry Barns, 1912–2008) がシュタイナーの言説に則して説明しているように、第一期は認識論的、科学的土台を確立する段階 (1880 年代–1910 年前後)、第二期は第一期の段階を芸術的に具体化していく時期 (1910 年前後–1917 年頃)、第三期は思想を社会化する時期 (1917 年頃–1925) であるが、本稿では著作の特徴を中心に区分し、次のような分け方をした。

第一期の著作の特徴は哲学的なアプローチが取られており、哲学的著作期とする。シュタイナーはカントを初め近代の哲学者たちの二元的認識論を批判し、またゲーテの自然観の影響も受け自らの一元論的認識論を確固としたものにしていく。こうした思索は十代後半の 1880 年頃から 1900 年頃まで徹底的に行われ、この時期の思想は『自由の哲学 (*Die Philosophie der Freiheit*)』と『ゲーテの世界観 (*Goethes Weltanschauung*)』などに著されている。

第二期は、シュタイナーは神智学協会に入会し、神秘主義者であることを公にした「神智学的転回」(1900)の時期であり、1900 年頃から 1919 年頃までである。この時期を神智学的著作期とする。『神智学 (*Theosophie*)』や『神秘学概論 (*Die Geheimwissenschaft im Umriss*)』、『いかにして高次の世界の認識を獲得するか (*Wie erlangt man Erkenntnisse der höheren Welten?*)』などの神秘的著作を多く著す。第一期で行った「認識」について

の思索は、神智学との出会いにより「人間性の進化」という方向が明確になる。人間の心の深みに踏み込むとともに、神性との繋がりや思想が構築される。この時期には芸術の分野ではオイリュトミー (Eurythmie)²⁰の形式も完成し、また建築の分野でも次々と心(精神)と体(物質)を結びつける方法が実践的に試された。

第三期は、第一期、第二期の思想を実践化した時期であり、実践思想的著作期とする。第一次世界大戦による人心が荒廃した状況のなかで、戦争のない世界の実現のため、人智学思想を実践にうつした 1919 年頃から亡くなる 1925 年までである。この時期には、社会改革をめざした社会有機体三分節化 (Dreigliederung des sozialen Organismus) 理論を提示し、経済や政治の領域が精神的な領域に主導される社会をめざした。この理論を基盤とした思想が農業や医療、教育の分野に広がり、各地で講演を行い『農業講座 (Landwirtschaftlicher Kursus)』、『治療教育講義 (Heilpädagogischer Kurs)』、『教育の基礎としての一般人間学 (Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik)』などとして出版されると同時に、シュタイナー学校、農業共同体、病院が設立された。こうした組織は、現在もシュタイナーの宇宙論に基づいた実践的な活動で成果をあげている。

哲学的、神秘主義的、実践的な傾向へと変化した彼の思想において、人間観と宗教性については、第一期を基盤とし、第二期の神秘主義的著作の時期に最も思索が深まっていったのである。

2. シュタイナーの人間観——ダイモンの人間と、「Leib (体)」、「Seele (魂・心性)」、「Geist (霊・精神)」の人間像——

では、シュタイナーの人間観を第二期の神秘主義的著作期以降に出版された資料をもとに、検討してみよう。

まず、その人間観の特徴は、古代ギリシアの密儀により見出されたダイモンの人間像が基盤となっているといえよう。彼は、神智学協会入会直前に行った講演の記録、*Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums* (邦訳『神秘的事実としてのキリスト教と古代の密儀』)において、「人間の心魂は神に似たものになると同時に、虫に似たもの」

²¹だとし、人間が聖霊ダイモンの仲介により神的なものにも地上のものにもなる存在であるという古代ギリシアの人間観を分析し、自らの解釈を示した。古代ギリシア哲学者の密儀体験は、「自分のなかの永遠のダイモン (der ewige Dämon in ihnen)」²²、「永遠の宇宙調和 (die ewige Weltharmonie)」²³、「宇宙理性 (Weltvernunft)・ロゴス (Logos)」²⁴を感得することであったとし、人間存在が、ダイモンにより神性になること、その神性は永遠や理性であることが述べられ、人間が、感覚的、感情的な動物の性質をもちあわすと同時に、理性という神性をもつものであることが確認される。

入会二年後に発表された著作『神智学 (*Theosophie*)』では、初期の哲学的著作である『自由の哲学 (*Die Philosophie der Freiheit*)』に見られる人間の意識に関する用語である「Gefühl(感情)」、「Denken(思考)」、「Wollen(意志)」などの哲学的用語は姿を消し、「Ätherleib (エーテル体)」、「Astralleib (アストラル体)」、「Leib (体)」、「Seele (魂・心性)」、「Geist (霊・精神)」、「Ich (自我)」などの神秘主義的用语が使用されている。

この中で人間存在は、まず大きく三相に分けられ、人間の構造は、「Leib」、「Seele」、「Geist」の三相構造が基本になっている。「体」、「魂」、「霊」と訳されることもあるが、「肉体」、「心性」、「精神」と訳されることもある²⁵。シュタイナーが、人間精神が生き生きとした実体をもっているもととみていたことを考えれば、和訳は前者の方が適切であるように思われるが、より客観的な議論のためには後者が適切であろう。しかし、本稿では、議論をスムーズに進めるために、必要なところは和訳を入れ、ドイツ語をそのまま使うことにする。以下、その働きについて整理した。

極めて単純化した説明ではあるが、シュタイナーは、個の身体感覚を「Leib」、個の内面世界を「Seele」、個を超え、宇宙と一致する神聖な世界であるとともに普遍的な精神世界を「Geist」という²⁶。「Leib」は、肉体である感覚器官により、外界から印象を受けとり「Seele」に伝え、性癖や情欲に生きる「Seele」は、それを感覚内容につくりかえ、保存し、「Geist」に伝える。真善美の永遠の世界に生きる「Geist」は、必要な体験を「Seele」から取り出し、その記憶を永遠に保存し、人間の行為に還元する。「Leib」、「Seele」、「Geist」は、このように、有機的に繋がり、一個の人間存在を形成している。

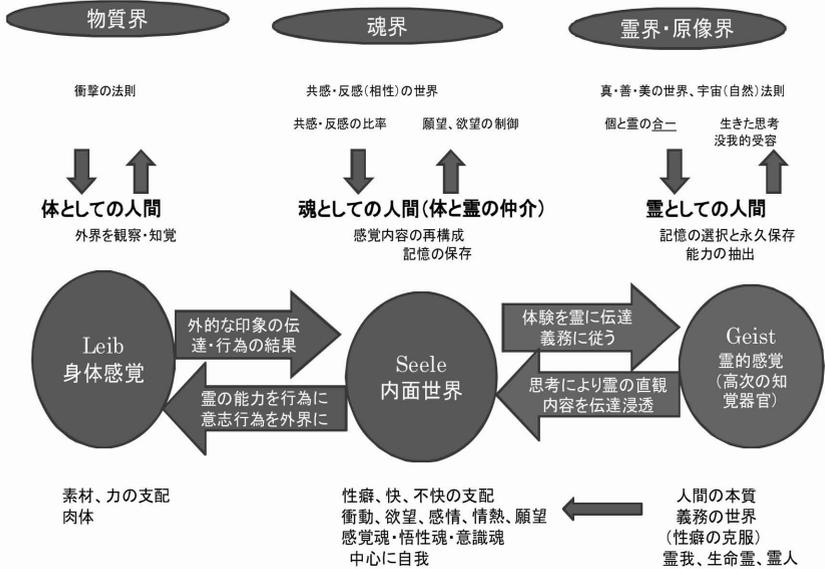
ここで問題になるのが、「Geist」である。「Geist」は霊あるいは精神とも訳すことができる。「人間の本質は Geist にある」²⁷と述べているように、彼は人間の本質を、精神的なもの、霊的なものだと見做している。しかし、この「Geist」は、人間より高次の世界に住み、「生きた思考」²⁸となり、日常の「Ich（自我）」を高次の「Ich（自我）」にするのである。このような高次の「Ich（自我）」とは、主観の中に客観が生まれた状態でもあり、「個体的な自我（Ich）の人格が全我（All-Ich）へと止揚される」²⁹という。

シュタイナーは更にこの三相の人間を細かく分類し、各相のもとに「Leib」を「*physischer Leib*（肉体）」、「*Ätherleib*（エーテル体）」、「*Astralleib*（アストラル体）」、「*Seele*」を「*Empfindungsseele*（感覚魂）」、「*Verstandesseele*（悟性）」、「*Bewußtseinsseele*（意識魂）」、「Geist」に「*Geistmensch*（霊人・精神的人間）」、「*Lebensgeist*（生命霊・生命的精神）」、「*Geistselbst*（霊我・精神的自己）」などを配置する。

このように、通常の間人は感覚中心の「Leib」と感情中心の「Seele」であると考えられるが、「Seele」は思考の働きで「Geist」と関わりをもつことで人間は神化されるのである。その「Seele」の神化される場が、「Seele」の核「Ich（自我）」であり、「Ich」は、「Geist」の世界の住人である「*Geistselbst*（霊我・精神的自己）」で満たされることで神化され、人間は自らの中に善を獲得するのである。このように「Ich」が神化された状態は、個的な統一でしかなかった狭い「Ich（自我）」が、自らの思考をもみることができる「Ich（自我）」（「*All-Ich*（全我）」）になるということである。

それぞれの構成要素の関係を整理すると以下ようになる。

＜シュタイナーの人間存在の構成：Leib(体)、Seele(魂、心)、Geist(霊、精神)＞
 (『神智学』より)



シュタイナーは、このように人間存在が「Leib」、「Seele」、「Geist」で構成されるのが理想だと考えていたわけであるが、その人間を「体」、「魂」、「霊」として見る三分法は聖書の記述にもある³⁰。

以上本節では、シュタイナーは、人間を地上的な存在であるとともに神性をも獲得できる存在であると見做していることが確認されたのであるが、その人間はシュタイナーの理論では、「Leib(体)」、「Seele(魂・心性)」、「Geist(霊・精神)」という三要素が調和し、有機的関係をもつことで、理想の人間存在になるというものであった。

3. 人間における宗教性——「Ich(自我)」の神化の過程——

上述したように、人間が、生命力や感情をもつ動物的存在であることを越

えて神的要素を持つことで、人間は真の人間になれると考えていたのであるが、そのために、「Geist (霊・精神)」の獲得が目標とされるのである。シュタイナーにとって「Geist」は、思考や理性、精神であると同時に、聖なる領域に属するものであった。

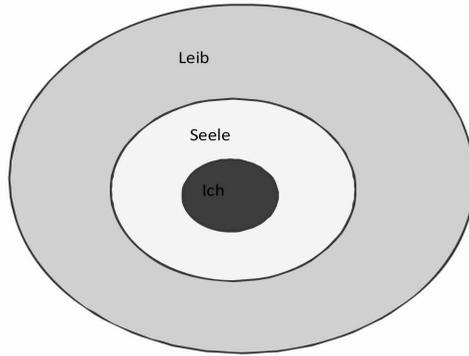
前節では、人間が神化されるとは、「Seele (魂・心性)」の中心である「Ich (自我)」に「Geistselbst (霊我・精神的自己)」が流入するというシュタイナーの言説に触れたが、その「Ich」は、「Leib (体)」や「Seele」、「Geist」らを統合する働きをする場所でもあった。

『自由の哲学 (*Die Philosophie der Freiheit*)』でシュタイナーは、「Ich」が①思考活動において、自分と思考する者が同一存在であることを知っているもの、②自分の思考活動をすべて自分が意志し、自分ですべて理解しながらまた、そうした活動を望んでいるもの、③思考の中に立ち、その活動を観察しているものだと説明している³¹。また、かつて米国におけるシュタイナー教育導入の立役者であり、半世紀以上にわたりシュタイナー教育に関わってきたバーンズ (Henry Barnes) は、シュタイナーの「Ich」を著書 *A Life for the Spirit* の中で①肉体や魂の外殻 (outer sheaths) をまとい、霊 (spirit) と繋がる。②肉体やパーソナリティー (personality) と結びつきながら、高度な客観性を獲得できる高位の意識を覚醒させるもの。③自己教育を通して成長し続ける知の中の知、だと述べている³²。

「Ich」は人間を個にも、また普遍的にもすることができる「純粋な思考」と結びつき、人間が自己を客観視するための外なる「霊界 (精神界)」から智慧を受け取る器官 (das Organ) ということになる³³。

以下に「Leib」、「Seele」、「Geist」と「Ich」の関係を、「Ich」の進化・神化という観点から図式化した。

<LeibとSeeleの外皮をもつIch>

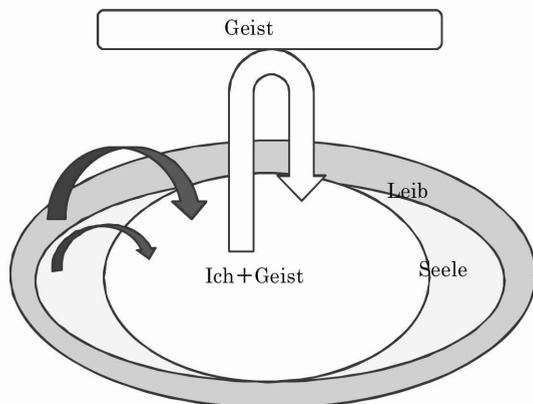


* Ich(自我)はLeib(体)とSeele(心性・魂)の体験を総括する

作成者:西井美穂

「Ich」は「Leib と Seele の支配者」にならなければいけないのである。なぜならば「Leib」と「Seele」の支配者なった「Ich」は主体的になり、主体的になって初めて「Ich」は「Geist」と繋がることのできるからである。主体的になった「Ich」は「Leib」と「Seele」に助けられ、「Geist」が自分の目的を実現するよう働きかける。「Ich」は、「Leib」と「Seele」の経験を総括し、真善美の「Geist」を自分に流入させるのである。以下は「Geist」が流入した後の「Ich」である^{3 4}。

<LeibとSeeleの経験を総括しGeistと結びついたIch>



* 主体的になったIch(自我)はGeist(精神・霊)に働きかけ、Geist(精神・霊)を獲得する。

作成者: 西井美穂

「Geist」の流入により、「Ich」はそれまでの感覚界における法則に加え、「Geist」の世界の法則に従う。「Geist」の世界は、鉱物の法則や生命の法則（生成と死滅）に関わらない、真善美の法則に支配される世界である³⁵。

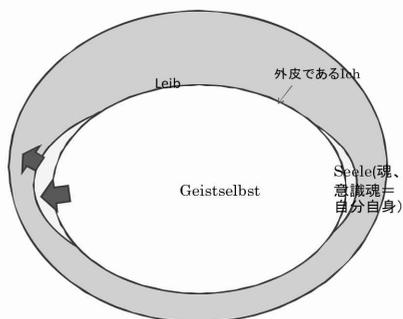
人間はこうして、生殖と成長、滅亡の法則、生成と滅亡に関わらない法則によって生きることになる。それによって真善美は、「Geistselbst（霊我・精神的自己）」となった「Ich」の中から直観として現れる。シュタイナーはこのことを次のように述べている。

霊我（Geistselbst）は、自分の中にこの同じ真理を担っている。しかも、その真理は自我（Ich）によって取り上げられ、自我（Ich）の中に包み込まれている。自我（Ich）によって、真理は個体化され、独立した人間本性になる。永遠の真理がこのように独立し、自我（Ich）と結びついたひとつ

の本性になることによって、自我 (Ich) 自身が靈我 (Geistselbst) となつて、永遠性を獲得する。靈我 (Geistselbst) は自我 (Ich) の中での靈界の顕現であり、感覚的知覚は自我 (Ich) の中での物質界 (die physische Welt) の顕現である。赤、緑、明、暗、硬、軟、暖、冷の中に物体界 (die körperliche Welt) の顕現が、真、善の中に靈界 (geistige Welt) の顕現が認識できる。物体界の顕現が感覚と呼ばれるのと同じ意味で、靈界の顕現は直観 (Intuition) と呼ばれる。どんなに単純な思考内容もすでに直観を含んでいる^{3 6}。

これを図式化すると、下の図になる。

<GeistselbstになったIch>



* Ich(自我)は靈我となる。靈我とは真理がIch(自我)の中で個体化したものである。Geist(靈、真理)はIch(自我)に包まれ、Ich(私)の最高の表現である意識魂となる。Geistselbst(靈我)=Ich(自我)=Bewußtseinsseele(意識魂)。
靈我はSeele(魂)を通してLeib(体)に影響を与える。

作成者：西井美穂

「Ich」が主體的になったとき、「どんな単純な思考内容も直観を含んでいる」状態になるのである。主體的であるというのは、「Leib」や「Seele」に対して「Ich」が主導権をとるということである。主體的な「Ich」が「Geist」の世界から取り出したい内容を獲得してくる。単純に言えば、身体感覚や感情に対して振り回されず、冷静に、また道徳的に自己の心に忠実に振る舞える心的状態が、そうした「Ich」が実現されているといえる。そのとき、「Ich」は「Geistselbst」になると同時に「Bewußtseinsseele (意識魂)」になり、

最も理想的な状態となるという。シュタイナーのいう人間性の進化の目標は、「Ich」がこのような状態になることである³⁷。

シュタイナーのいう「Ich」とは、個性としての人間存在において中心となるものであるが、それは利己主義を超えて他者そのものを受け入れる場所でもあった。「Leib (体)」や「Seele (魂・心性)」の力を結集し、外部の世界の知覚内容や、内部の感情により形成された内的世界を統合理し、それまでの記憶を「直観」で智慧にすることが「Ich」の神化、すなわち人間が宗教性をもつことであった。

4. 西田幾多郎の『善の研究』とシュタイナー

シュタイナーの人間構造において、「Geist (霊・精神)」は神的世界の住人であった。「Geist」と関係をもつことで、人間は神化されるということが確認されたのであるが、ここで注目したいのは、その「Geist」を受け取る場所である。シュタイナーはこの場所を「Ich (自我)」、「純粋な思考」が行われる場だと考えた。「Ich」は、個としての人間を統一している場であり、神的世界に開かれ、善を獲得する場である。この「Ich」は、西田幾多郎 (1870 - 1945) の、個としての人間存在の中心、主客が統一され宇宙に開かれ、善を感得する場であるという「純粋経験」の思想に驚くほど類似しているのである。

その「純粋経験」が考察された、西田が初期に著した『善の研究』は、西洋哲学が日本に導入されて初めて書かれた、日本人の独創的な哲学体系が展開されたと言われる書である。西田哲学の出発点として位置づけられているこの書は、四篇から構成され、第一篇が「純粋経験」、第二編が「実在」、第三編が「善」、第四編が「宗教」となっている。第三編の「善」では、善が「自己を知ること」³⁸、「理想の実現」³⁹、「意志の発展完成」⁴⁰と見做されており、「意志の発展完成」は「自己の発展完成」であり、善は全体を統一する最深の統一力である「純粋経験」だと論じられているのである。この「純粋経験」は、対象を認識するにあたり、知覚し、意識が分化する以前の主客未分の状態であるが、これは単に対象を知覚する以前の状態というわけではなくところに西田の特徴があるという⁴¹。現在意識において、過去の意識が働

く前に意識統一が必然として働いており、主客の対立にみえる底にも実は統一の力は働いている。この無意識のうちに「自己の根底」で働く意識統一の状態が「純粹経験」である。

唯一の実在が意識だとする西田は、「絶対的統一」力は神だと見做し、意識を統一する「純粹経験」は、同時に自然を統一することになり、人間と自然、宇宙を統一するものだとした。人間において、それは自己を知ること（自己統一）として現れるのであった。「自己を知れば人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本体と融合し神意と冥合するのである」⁴²と述べているように、自己を知ること、善を知り、神と合一するのだとした。しかし、こうした神への道は、自己の安心のためという利己的な要求から出発するのではない。自己の中から主体的にできる「大いなる生命の要求」⁴³でなければならないという。神人合一は、「主観的統一を棄てて客観的統一に一致する」のである。

このような自己の統一から、自己を捨て世界と結びつく意識という議論を展開する西田の思想を、宗教学者小野寺功は、論文「西田幾多郎から聖霊神学へ」⁴⁴の中で、キリスト教の「聖霊神学」と関係づけることを試みた。小野寺は、「霊」という「場」を自覚することで人間は「自己超越していく」⁴⁵といい、西田の「自己の根底」が「霊性」の「場」だとした。

シュタイナーのいう「Ich（自我）」が「Geistselbst（霊我・精神的自己）」に神化された状態を、小野寺の理論から考察すると、西田の「個としての自己を知ること、善を知り」、その後の「主観的統一を棄てて客観的統一に一致する」状態が、「Geistselbst」という「Geist（霊・精神）」が流入した「Ich」のシュタイナーのイメージと重なる。シュタイナーも西田も、「自己を知ること」、自己を認識することで、神的合一に至り、内部から主体的に湧いてくる善を経験する。

しかし、西田の自己が宇宙に開かれ、消滅するのに対し、シュタイナーの「Ich」は、「Geist」と結びついてもなお残るのである。

5. 人間を神的世界へと導くキリスト

このように、自己認識を通して宇宙と繋がり、内部に神性を感得する体験

を、シュタイナーは古代ギリシアの密儀宗教の体験と同質のものだと考えた。しかし、そうした体験により感得した自らの内部に芽生えた神性は、キリスト教の源であると論じた。神智学協会入会直前に行った講演 *Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums* (邦訳『神秘的事実としてのキリスト教と古代の秘儀』)で、古代ギリシアの密儀精神で見出される神性をキリスト教の源泉であると論じた⁴⁶。

その講演前半では、シュタイナーは、プラトン（紀元前 428 頃－348 頃）の神秘思想を中心に、ヘラクレイトス（紀元前 535－475）などプラトン以前の哲学者の思想を吟味し、古代ギリシアの哲学者にとって神秘的認識がいかに重要であったかを語っている。後半では、プラトン神秘思想がフィロン（20 年頃－40 年頃）⁴⁷を通してどのように福音書の成立に影響したかを述べながら、「キリスト教はゆっくりと密儀から芽生え……密儀の叡智がキリスト教の言葉をまとう」⁴⁸と結論づけている。

彼は初期グノーシスを含め、後のキリスト教神秘主義者らを好意的にみた。しかし、彼らが自己の外に絶対的な神をおくことについては批判的であった。シュタイナーによれば、自らの中に「自分の神性」しか見出せないものに、グノーシスの教派は外なる神へ自己を近づけようと絶え間ない努力を続けるが、神と自己の神性の隔たりは縮まるわけもない。この縮まらないことが、神の存在の証明とされていると次のように批判したのである。

人間が心魂のなかで認識できたものと、キリスト教が神と名づけるものとのあいだには隔たりがある。それは、知識と信仰の隔たり、認識と宗教的感受とのへだたりである。古代の密儀の徒には、この隔たりはなかった。密儀の徒は、自分が神的なものを、段階を追ってしか把握できないと知っており、なぜそうしかできないのかも知っていたからである。彼には段階的に体験される神的なものなかに、本当のいきいきした神的なものが存在していることが明らかである。彼には、一柱の完全な、完結した神について語るのは困難である。密儀の徒は、完結した神を認識しようとはしない。彼は神的な生命を体験しようとする。彼はみずから神化しようとする。彼は神性と、外的な関係を持つとは思わない。この意味で、キリスト教

神秘主義は無条件のものではない。これがキリスト教の本質になった⁴⁹。

シュタイナーにとっての神とは、外にある絶対的、超人的な神ではなく、人間の内の自己と等身大の神、「神的な生命」であった。すなわち、彼は人間一人ひとりの個体、個性こそが存在の条件であると考えているのである。観念的なものを重要視しつつも、観念の世界に浸るのではなく、現実の世界で生きる人間としての生をも重視する。意志、感情、思考を含め人間の主体性から出てくるものが中心となり、外なる神はその人間を助ける存在として解釈されていた。

シュタイナーのこうしたキリストおよびキリスト教解釈には「異端」⁵⁰という批判もあるが、「Ich（自我）」が「Geist（霊）」と結びつくことで、人間は神化され善を獲得するという過程は、「Ich」が「靈性」を獲得するといったキリスト教の「靈性神学」として理解されることが可能であることを、我々は先の小野寺論文でみてきた。しかし、その宗教論は、「Ich」が「Geist」を獲得する契機をキリストが与えたとしながら、強調されるのは人間を存立させている「Ich」なのである。キリストは「個別な自我（Ich）に確かな自分を感じとることができるような事柄を人々に提供した」⁵¹のであり、「すべての人が自我を本当に所有できるようにしよう」⁵²としたという。キリストは「Ich」に働きかけ、神的世界に自己を開く衝動を与えたのであり、「Ich」の独立こそが人間を内的に深化させ、他者との繋がりをもつ条件であるとされるのである。

おわりに

これまでの検討により、人間が、感覚や感情に支配される人間界の存在であるだけでなく、思考や理念により真善美に達することができる神的存在でもありうるというシュタイナーの人間観が明らかとなった。人間が人間を越えた神性を獲得するためには、キリストの存在を必要としたが、シュタイナーの考える神とは、人間を越えて人間の外に聳えるキリスト教の神ではなく、古代ギリシアの密儀精神が見出した、人間と等身大の人間の内部にある神を意味した。

一方、西田が神としたのは人間の無意識において働く「統一的作用」であった。この統一は、「主観的統一を棄て客観的統一」を行い、人間精神を「個人の発展より、進んで人類一般の統一的發展」⁵³に導くためのものだと見做していた。西田は、人間がこの境地に至ることを再生、あるいは見性といい、また、道徳的見地からすれば、それは人格の実現であり善であると述べた⁵⁴。

西田のこうした論理の展開がシュタイナーと類似していると思われるのは、シュタイナーの提示した一元論の流れが、自己認識から始まり、主客が統一される点であり、その統一は「Ich (自我)」が「All-Ich (全我)」になることで、同時に内から善が生まれるという流れにおいてであった。西田においてその過程は、「自己を知ること」により「主観的統一を棄て客観的統一」が行われるというもので、最終的には人間も自然も「絶対的統一」力の下に融合される。自己統一は、世界との衝突から自己矛盾に陥り、大なる生命を求め、「共同的精神」となる⁵⁵。西田の「共同的精神」は、自己の統一より進んだものとして見做されるのであるが、晩年シュタイナーも、人智学の実践活動を行う中で、「Ich」の独立よりも共同することの重要性を説くことになる⁵⁶。人智学の中心軸であった「Ich」の揺らぎを、シュタイナー自身気づいていたといえよう。

シュタイナーと西田の違いは、これまでの議論の中で明らかにされたように、人間中心の世界観と、そうではない人間も自然も神も統一され融合される世界観であった。シュタイナーの世界は、人間と神の世界を二元的に分化し、人間の意志で神的世界へと結びつくというもので、人間の内的努力が要請されるのである。それに対し、西田の世界は、統一力という同一の根源をもつ同心円上に、人間界や自然や宇宙があり、それが大いなる意志の下で全体的に統一され、融合されていく。同一のものをめざしながら、シュタイナーと西田の人間の理解は全く異なったものとなったのである。

シュタイナーは人間とは何かを探求する中で、人間が生きるために「Ich」を必要としながら、「Ich」を持つが故に神的世界と完全に合一できないジレンマを抱えていた。そのジレンマに気づきながらも、神的世界を選択し、神に近づくことを求め続けずにはいられない存在が人間ということである。シュタイナーの理論では、神と人間の分離、「Ich」同士の分離は統一されても

融合されることはない。人間は、人間でありながら、人間を越えたものに近づこうと夢見る存在である。この深い分断こそが、人間が宗教を求め、人間に宗教性を付与する要因ではないだろうか。神との合一において、個が消滅し、大いなるものにすべてが融合される世界において、人間が自覚的に宗教に向かうことはありえない。

本稿で明らかにされたのは、神と人間の二元化された世界で、人間は個の独立を経験し、直接神との繋がりを求め続ける宗教性を内部にもつが故に、神性を付与される存在であるというシュタイナーの人間観であった。しかし、人間と神との関係において、主体は人間である。人間を個にする「Ich」は、人間の主体であり、普遍を求め続けるのであるが、個を存立させているため神との合一後も「Ich」は消滅せず、融合は果たされない。

晩年、シュタイナーが「Ich」の独立よりも、他者と協働することに意義を見出していたことを考えると、その後に展開される思想は西田のような哲学に近づいていく可能性があった。今後の課題は、理論では実際の人間を繋げることのむずかしさを痛感したシュタイナーが晩年どのように個と他者との関係を結びつけようとしたのかについて考察したい。

註

¹ Rudolf Steiner, *Anthroposophische Gemeinschaftsbildung*, Rudolf Steiner Gesamtausgabe, Bibl.-Nr. 257, 1974, S. 76 : In *Rudolf Steiner und die Anthroposophie--Wege zu einem neuen Menschenbild--* von Walter Kugler, S. 8.

² 識名章喜「ナチズムを培養したドイツ・ユートピア小説」『ユートピアの期限』坂上貴之・巽孝之・宮坂啓造・坂本光編著、慶応義塾大学出版会、2002年、173-193頁、175頁。

³ Rudolf Steiner, *Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2005 (9. Aufl.) S. 21. シュタイナー『ルドルフ・シュタイナー教育講座 I 教育の基礎としての一般人間学』高橋巖訳、筑摩書房、1999年、5頁。

⁴ ロシア人のブラヴァツキー夫人（ブラヴァツカヤ）に始められたといわれる神智学はヨーロッパの価値観やキリスト教的ドグマへのアンチテーゼとして位置づけられる。神智学という言葉は、紀元三世紀のアレクサンドリアの哲学者、アンモニオス・サッカスが最初に使用したといわれるが、現代の神智学の潮流はこの意味で、近代神智学といわれるべきであろう【『神智学の

鍵』16-17頁（神尾学『人間理解の基礎としての神智学』コスモス・ライブラリー、2006、所収）。この神智学は、しかし当初から「研究者が自分の空想に従ってどんなふうにも色づけることができるような、あいまいな博愛主義的哲学」（レイチェル・ストーム『ニューエイジの歴史と現在—地上の楽園を求めて—』高橋巖・小杉英了訳、角川選書、1993年、21頁）という問いがでるようなゆるやかな、あらゆる主要宗教の基底をなす神の叡智を中心におく組織であった（C.W.リードビーダー『神智学入門』宮崎直樹訳、1990年参照）。

⁵ 日本へのシュタイナー思想の受容については、衛藤吉則「戦前 シュタイナー教育の研究者たち」（『広瀬俊雄 秦理恵子編『未来を拓くシュタイナー教育—世界に広がる教育の夢—』ミネルヴァ書房、2006年、190-224頁）に詳しい。

⁶ 西平直『シュタイナー入門』講談社現代新書、1999年、12-13頁。

⁷ Ernst-Michael Kranich, Lorenzo Ravagli, *Waldorfpädagogik in der Diskussion—eine Analyse erziehungswissenschaftlicher Kritik—*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, 1990, S. 7, S. 60. 衛藤吉則「シュタイナー教育学をめぐる『科学性』問題の克服に向けて—人智学的認識論を手がかりにして—」『人間教育の探求』ペスタロッツ・フレーベル学会編、1997年、第10号、101-115頁、114頁。

⁸ セオドア・ローザク『意識の進化と神秘主義』志村正雄訳、紀伊国屋書店、1978年、180頁。「異端と言っていいほど非正統的なもの」とローザクはいう。

⁹ 前者には、シュタイナー研究の先駆けである高橋巖、バーンズ（Henry Barnes）が、後者には『ルドルフ・シュタイナー——その人物とヴィジョン——』を著したコリン・ウィルソンがその代表としてあげられる。

¹⁰ 教育学者広瀬俊雄は、シュタイナーが人間を、「本来的に宗教的世界に生きる存在」（広瀬俊雄『シュタイナーの人間観と教育方法—幼児期から青年期まで—』ミネルヴァ書房、1992年、262頁）であり、「宗教的な要素」（Rudolf Steiner Gesamtausgabe 306, 1956～, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, S. 175 [広瀬、前掲書、262頁、所収]）が人間に本来的に備わっているとシュタイナーはみていたという。宗教的要素とは広瀬によると、没入・献身の態度、感謝、愛、超感覚的なものを絵画的に捉える能力、感情を通し思考で理解する能力、崇高で善や真理に向かおうとする根源力などである、キリスト教に基づく宗教的本性だという（広瀬、前掲書、275頁）。

¹¹ シュタイナーの道徳的立場および人間認識を示す概念である。人間は個

体を基本とし、理念は個別に現れるものである。その個人の理念の総計である直観が行動と結びつく時、個人の中に道徳的内実が生まれ衝動となり行動へと向かわせるという考え方である。

¹² Henry Barnes, *A Life for The Spirit*: Hudson, NY: Anthroposophic Press, 1997, pp 240-242。高橋巖は自由の哲学と愛の思想が結びつき、最終的には救済の思想だという(『シュタイナー哲学入門——もう一つの近代思想史——』角川選書、1991年、165頁)。原子論についてはクグラー(Walter Kugler)により指摘されている(Walter Kugler, *Rudolf Steiner und die Anthroposophie--Wege zu einem neuen Menschenbild--*; DuMont Buchverlag, Köln, 1991, S. 26)。

¹³ 今井重孝「シュタイナーの認識論の現代的射程」『ホリスティック教育研究』第一号 17-25頁、ホリスティック教育研究会、1998年、17頁。

¹⁴ Rudolf Steiner, *Mein Lebensgang*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2000 (9. Aufl.) S. 395。シュタイナー『シュタイナー自伝II』伊藤勉・中村康二訳、ぱる出版、2001、183-184頁。

¹⁵ ロマン主義の流れの中での位置付けはシュタイナー研究者高橋巖がその代表であり(『シュタイナー哲学入門——もう一つの近代思想史——』角川選書、1998年、参照)、仏教思想との関連で位置づけているのは、中村元である(『比較思想論』岩波書店、2005年、参照)。

¹⁶ Helmut Zander, *Anthroposophie in Deutschland*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 2008。

¹⁷ 同書、25頁。

¹⁸ 高橋、前掲書、24頁。

¹⁹ 講演回数は、小杉英了『シュタイナー入門』(ちくま新書、2003年、11頁)の地図を参考に集計した回数である。

²⁰ オイリュトミーは、1912年に17歳のロリー・スミスの母親が、シュタイナーにスピリチュアルな新しい舞踊の形式を求めたのが始まりであった。後、妻となるマリー・フォン・シヴァルスの回想録によると、立ち方、歩き方、走り方、体の使い方の基本型から作り、試行錯誤を繰り返しながらゲーテアムムで完成されていったという(Marie von Sivers, *Life and Work of Rudolf Steiner*, pp179-180. In Henry Barnes, *ibid.*, p108)。オイリュトミーの目的は、発話され、詩的な言葉と音楽的な調べの背後にある創造的、造形的な力を空間で表現することである。演技は、音楽的な選択と同様に、文学的で物語性を含んでいる。それにより、空間意識、調和、リズム、バランス、芸術的感性を養うことができるという。セラピーの形式もあり、治療オイリュトミーが効果をあげている(Henry Barnes, *ibid.*, p109)。

²¹ Rudolf Steiner, *Das Christentum als mystische Tatsache und die*

Mysterien des Altertums, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2002 (9. Aufl.) S. 44. シュタイナー『神秘的実事としてのキリスト教と古代の秘儀』西川隆範訳、アレテ、2003年、50頁。

²² ebd., S. 49. 同書、56頁。

²³ ebd., S. 52. 同書、58頁。

²⁴ ebd., S. 67. 同書、72頁。

²⁵ 高橋巖は一貫して「Seele」を「魂」、「Geist」を「霊」と訳している。しかし、吉田は、「Seele」を「心性」、「Geist」を精神と訳している。

²⁶ 「Leib (体)」とは、肉体、身体そのものではないという。「存在に何らかの種類の『形姿』、『形態』を与えるものをいう。『体』を物体ととりちがえてはならない」(Rudolf Steiner, *Theosophie*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1962 (32. Aufl.) S. 35. シュタイナー『神智学』高橋巖訳、ちくま学芸文庫、2000年、48頁)。

²⁷ ebd., S. 127. 同書、170頁。

²⁸ ebd., S. 145. 同書、194頁。

²⁹ Rudolf Steiner, *Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1977 (6. Aufl.) S. 34. シュタイナー『神秘主義と現代の世界観』西川隆範、白馬書房、1989年、47頁。

³⁰ 日本聖書協会『新共同訳 新約聖書』「テサロニケの信徒への手紙一」1999年、第5章第23節。

³¹ *Die Philosophie der Freiheit*, S. 45f. 『自由の哲学』、69-71頁。

³² Henry Barnes, ibd., p152. 神尾はその著書『人間理解としての神智学』(神尾学著、コスモス・ライブラリー、2006年、60頁)で Ich (自我)を神智学用語でいうパーソナリティ (personality) だという。パーソナリティは、肉体、エーテル体、アストラル体、低位メンタル体 (メンタル体とは Geist にあたり、その最下位のレベル) までの意識のレベルをいう。これは、意識が肉体の個別性に引きずられ他者と自己を区別する意識レベルである。

³³ この Ich (自我) が器官であるという表現は、シュタイナー自身が *Die Mystik im Aufgange des neuzeitlichen Geisteslebens und ihr Verhältnis zur modernen Weltanschauung* (Dornach, 1977)の中でも、「Ich (自我)はその中で Ich (自我)が自らを語る形態、器官 (das Organ)」(S. 90)であると述べていることから誤りではない。

³⁴ Rudolf Steiner, *Theosophie*, S. 44. シュタイナー『神智学』、60頁。「自我は、人間の中で永遠の光として輝く光の放射を、自分の中に採り入れる。人間は体と魂の諸体験を『私』において総括し、真と善との思考内容を『私』

の中へ流入させる。一方からは感覚の諸現象が、他方からは霊が、『私』に自己を打ち明ける。体と魂は『私』に奉仕し、『私』に自分を委ねるが、『私』は自分の目的を霊が実現してくれるように、霊に自分を委ねる。『私』は体と魂の中に生き、霊は『私』の中に生きる。そして自我の中のこの霊こそが、永遠なのである」。

³⁵ ebd., S. 44f. 同書、60 頁。

³⁶ ebd., S. 45. 同書、61–62 頁。

³⁷ しかし、Ätherleib (エーテル体) が浄化され Lebensgeist (生命霊・生命的精神) になったり、physischer Leib (肉体) が浄化され Geistesmensch (霊人・精神的人間) になったりするのとは不可能だという。というのは、Ich (自我) がすべてを浄化することができるのは、Ich が完全に意識的に働いたときであるからである。現代人が意識上でできることはシュタイナーによればわずかであり、ほとんどが我々がわからない無意識の中の働きで Ich は進化を促されているのである。(Rudolf Steiner, *Das Johannes-Evangelium*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2005 [11. Aufl.] S. 139. シュタイナー『ヨハネ福音書講義』高橋巖訳、春秋社、2005 年、154 頁)。

³⁸ 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、1990 年、206 頁。

³⁹ 同書、179 頁。

⁴⁰ 同書、180 頁。

⁴¹ 横田理博「西田幾多郎の『善の研究』とウィリアム・ジェイズム」『宗教研究』第 83 巻、362 号、第 3 輯、49–71 頁、2009 年参照。横田は、西田とジェイズムの「純粹経験」の比較において、西田がジェイズムと異なっている点を、意識が主客未分の統一状態のみならず、その統一が分裂して再統一する展開過程や、更には統一力そのものも含むものであることを揚げている (59 頁)。西田の「純粹経験」は、主客未分の状態を想定した点においてのみジェイズムを継承していると横田は述べている (67 頁)。

⁴² 西田、前掲書、206 頁。

⁴³ 同書、210 頁。

⁴⁴ 小野寺功「西田哲学から聖霊神学へ」『宗教研究』第 84 号、第 2 輯、23–49 頁、41 頁。

⁴⁵ 同論文、37 頁。

⁴⁶ 「キリスト教の源泉がいかに古代の秘儀のなかで準備されていたかが、本書において示される」(*Das Christentum als mystische Tatsache und die Mysterien des Altertums*, S. 8. 『神秘的事実としてのキリスト教と古代の密儀』14 頁)。

⁴⁷ フィロンはユダヤ人哲学者で、プラトンの『ティマイオス』の影響を受

け、旧約聖書を解釈した。キリストをロゴスと考える。「プラトンとまったく同じように、人間の心魂の運命のなかに、宇宙の大きなドラマの完結、つまり魔法にかけられた神の目覚を見た。彼は心魂の内的な行為を言葉で描いた」(ebd., S. 159. 同書、165頁)。

⁴⁸ ebd., S. 152. 同書、157頁。

⁴⁹ ebd., S. 156f. 同書、161-162頁。

⁵⁰ セオドア・ローザク、180頁。「シュタイナーがパーソナリティを高く考えることには、強度のロマンティックな衝動があって、ゲーテやニーチェが、さらに神秘的なトーンにおいて反響している。不幸にして（と私には思われる）シュタイナーは、この中心的な考えを確言するに当たって、キリスト教と『ゴルゴダの丘の秘蹟』を彼の全体系の軸とするのが適当だと考えた。進化の偉大な道程を支配するのは、究極的には『キリスト事象』なのであり、われわれの進化的な運命を支配するのはキリスト教的な考え方による魂なのである」(179頁)。

⁵¹ Rudolf Steiner, *Das Johannes-Evangelium*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 2005 (11. Aufl.), S. 82. シュタイナー『ヨハネ福音書講義』高橋巖訳、春秋社、2005年、84頁。キリストの使命は、キリスト衝動により進化の最終目標に向けての変容を遂行できるようにすることであり、最初の自我の自立 *selbständig*（「私である *Ich-bin*」と意識できる自己意識的な人間にする）を促すことであった (ebd., S. 104. 同書、112頁)。

⁵² ebd., S. 146. 同書、160頁。自我を所有することで、他人の内奥の裁き手になってはならないという。ここで自我は個人において聖域で、だれもはいつてはいけないというシュタイナーの考えが読みとれるのである。

⁵³ 西田、前掲書、202頁。

⁵⁴ 同書、219頁。

⁵⁵ 同書、211頁。

⁵⁶ スイス、ドルナッハの人類学協会本部のあるゲーテアヌムが付け火により焼失した事件のことである。ゲーテアヌム焼失事件は、シュタイナーを個人崇拜する過激な旧メンバーと新メンバーとの間の亀裂から内紛に発展した結果だといわれている(Henry Barnes, ibd., p181)。

(mihonisi@mocha.ocn.ne.jp)